



カセイ・イノウエ、ステップス初個展と共に日本での本格的な個展も初である。私がイノウエと知り合ったのは2011年頃だろうか。東邦画廊で画廊主の中岡吉典に日影眩を紹介してもらったのは、日影のウェブサイトを見て思い返すとどうやら2007年らしい。この会場で、日影からNYDCのワカコ・イシダの紹介があったことを憶えている。2004年頃からダンス批評を書いていた私は、NYDCを取材した。ところがNYDCのウェブサイトを見ると、記事は2011年となっている。細かいことは必要な時に呼び覚まされるであろう。ここで重要なのは、カセイ・イノウエである。NYDCの卓越したダンスについての私の評は、最新の2015年の公演も含めてNYDCのウェブサイトに掲載されているので、興味があれば読んで欲しい。強靱な肉体を誇示するダンスでも、踊ることを超越するためにコンセプトに委ねすぎるコンテンポラリーダンスでもない。本当に人間が人間以外の、人間が構築する以外の生命である生き物と「自然に」調和するようなダンスは必見である。違和感なく踊ることは、卓越したテクニックを有する。それを感じさせないのが、NYDCのダンスなのである。カセイがイラストを描いていることは何となく知っていたが、これほどまでの作品であることに今回の展覧会で驚愕した。違和感なく「踊る」とこと同様、違和感なく「描

いて」いるのである。夥しい数のイラストは「ファッションデザイナーの父のアトリエで見たマネキン」「バレエの幾何学的な様式美/モダンダンスの歪むトルソー」「母の書に見た流動的エネルギーのうねり」「魂の発露としてのダンス/身体という枠を超える」というカテゴリー別に分けられている。

私が重要視したいのは、カセイがダンスの振付をイラストに反映させているのではなく、ダンスと同じスタンスでイラストを制作している点にある。確かにカセイはギャラリーの入口に置かれている二冊の図書『ダンススケッチ ヒトダンゴ』『ダンスだいすき』はダンスを主題としているイラスト絵本であるが、今回出品された作品群を見ると、身体の動き（ムーヴ/ジェスト/アチチュード）を「描き止めて」いるのではない。カセイが持つダンスへの「態度」が盛り込まれている。

例えば一つの小さなイラストを拡大して見てみよう。草原に一本の茎が際立って高く伸び、花を咲かせている。草原は望遠鏡で覗かれた視線のように丸く割り貫かれ、円と作品の矩形の縁の空間には、波のようにも有機的生物にも見える文様が描かれている。円の中と外のタッチは異なりながらも、共に緻密な筆致が施されている。この綿密さこそ、カセイのダンスそのものなのである。

